

『斬、』

安井文 謎の美女

2018年 新日本映画社 80分

監督 塚本晋也

脚本 塚本晋也

出演 池松壮亮、蒼井優、塚本晋也

『斬、』はシンプルで強い物語、塚本晋也監督の集大成にして傑作。そして、池松壮亮さん、蒼井優さんの代表作と言いたい。

観終わって沸き起こる感情を言葉にできずに戸惑ったが、映画館へ三度を足を運んだ。

激動の幕末、静かな山村。人々がのどかに畑仕事をしている。李之進（池松壮亮）と市助（前田隆成）が激しく木刀で打合う光景さえどこかのんびりしているのは、市助の姉、ゆう（蒼井優）が傍らにいるからだろうか。彼らの前に澤村（塚本晋也）が現れる。温和な顔の下に狂気を隠した老獪な老武士。彼が李之進を手に入れようとするあたりから空気が一変する。

李之進が真剣を見つめる。さやから抜き出して振っては戻す。重く耳障りな刀をさばく音が、刀の明確な存在理由を意識させる。過剰なまなざしは揺れていて、彼の迷いを伝える。誠実でやさしそうな李之進、彼に人を斬ることなどできるのだろうか。

その彼を熱いまなざしで見つめるゆう。彼女は感情を抑えない。嫌なもの嫌、見たくないものは見たくない、大切なものを傷つけられたら仕返しは絶対してほしい。そして、それは李之進にやってほしい。

争いは、個人的な衝動から発生する。一度起きた争いを鎮めるのは容易ではない。だから、李之進は事を荒立てずに済まそうとし、ゆうの願いはかなえられない。かわりに澤村が李之進を覚醒させるため、その争いとゆう一家を利用した。結果、李之進とゆうの日常は壊され、皮肉なことに澤村もまた自滅する。二人の行く末は語られず、ゆうの絶叫と李之進の息遣いだけが尾を引く。

作中もつとも変化するゆう。彼女の言動にイライラする。でも、目の前の出来事と自分の感情に囚われ、冷静に考えることが出来ない彼女は、私かもしれない。

現実やネットの世界で不寛容が蔓延している。いつも誰か

がどこかで誰かの揚げ足をとり、別の誰かが便乗して炎上している。

それらは「明日は自分が巻き込まれるかもしれない」という不安をあおる。

そして、その不安は漠然と身の内に潜み、ふとした瞬間に顔を出す。この作品を見た後に沸き起こった感情はそれに似ている。

短いこの作品にそれらを想起させる巧妙な仕掛けを忍ばせる塚本監督の手腕に鳥肌が立つ。



『こんな夜更けにバナナかよ 愛しき実話』

西松 優 日本映画愛好家

2018年 松竹 120分

監督 前田哲

脚本 橋本裕志

出演 大泉洋、高畑充希、三浦春馬、萩原聖人

冒頭、砂時計の砂が落ちるのを大写しする。難病の主人公鹿野（大泉洋）の短い命を象徴すると思いきや、お湯を注いだカップ麺の時間を計らせ鹿野が横柄に介護ボランティア（以下、ボラ）に食べさせるよう命令するところである。難病映画といえば、主人公が周囲の人たちの献身的な介護や愛情に支えられ、それに感謝しながら闘病する姿を感動的に描くのが一般的であるが、この映画はその常識を大きく覆している。

この映画は難病の筋ジストロフィーで首と手しか動かさず二十四時間人の介護が必要な三十四歳の鹿野とケアハウスで彼の自立生活を支えるボラたちの物語である。

この映画は笑いあり、涙ありの、ほのぼのとした雰囲気と

明るさに包まれたエンターテインメント作品であるが、目を凝らしてみると障がい者鹿野の生き方を強く押し出した社会派映画のように見えた。この物語内の案内役は新米ボラの医学生田中（三浦春馬）とその恋人美咲（高畑充希）である。

ボラはサービスを与えて満足し、障がい者は感謝するといふ旧来の常識を鹿野は否定し、「自分とボラは対等」、「生きることとは迷惑を掛け合うこと」と主張する。好きなものを食べ、好きな所へ行き、自宅に住むという「人並みの自立生活」を実現したためボラにわがままに振る舞うが、一方で目標を持ち全力で日々を生きようとする。自分を人前に晒すことをもいとわない。強い意志とバイタリテイに溢れる鹿野の生き様は、「生きる」とは何かを強く観客に問いかけてくる。

この映画は鹿野を聖人化しない。敬遠しがちな障がい者の性欲・入浴・排せつ場面をマイルドに挿入し、女性に惚れっぽくお喋り好きでちやほやされるのが大好きな俗っぽさも描き出す。また、鹿野に失望し去るボラ・共感するボラと賛否両者を映す。

美咲は傲慢な態度の鹿野に最初反発するが、徐々に鹿野の生き方、隠れたやさしさに触れるうちに惹かれ新たな自分の目標を見つけ出していく。その心と行動の変化の描写が高畑

の演技力と相まって素晴らしく、観客にジワジワと伝わって来る。そして、大泉洋は鹿野になり切って、わがままな態度を明るい雰囲気に変化する一方、心の悩みや辛さを繊細に表現する。長編で複雑な群像の原作を原作と異なる明るいタッチで共感の持てる作品に仕上げた橋本裕志の脚本の力も大きい。ラストが印象的で元気がもたらえた。障がい者・家族の悩みがわかり、自分の持つ常識の誤りに気づかされた。お勧めの一作である。

『愛しのアイリーン』

村上 暁 スタッフ

2018年 日本 137分

監督 吉田恵輔

原作 新井英樹

出演 安田顕、ナッツ・シトイ

2016年5月公開の『ヒメアノール』、2018年1月公開の『犬猿』、そして、最新作『愛しのアイリーン』。直近3本の吉田監督作品は、映画館で見て大いに感動、大満足の映画だった。

新井英樹の漫画が原作。

主人公は、安田顕演じる42歳独身、パチンコ店勤務の岩男。農業をしている父(品川徹)、母(木野花)との3人暮らし。田舎で出会いがない上に奥手という、婚活にはハードな状況だが、あふれる性欲処理のため、一刻も早く結婚したい。

日本人の嫁を見つけることをあきらめた岩男は、お見合いツアーでフィリピンへ。そこで紹介されたのが、貧しい家庭に生まれ、家族へ仕送りをするために日本人との結婚を受け

入れたアイリーン18歳(ナッツ・シトイ)だった。

フィリピンで結婚式を済ませ、岩男はアイリーンとともに実家へ戻る。突然現れた外国人の嫁を受け入れられず、岩男の母は激怒する。また、アイリーンも元々岩男が好きで結婚したわけではないので、なかなか心も体も開かない。

アイリーンの愛情を得たい。母親の理解を得たい。普通の幸せがほしだけなのに……。なかなかうまくいかない岩男を見て、我々も身もだえする。

主人公の岩男は、徹底して無様である。主演の安田顕は、体を張ってそれを表現して見せた。冒頭では、自室でビデオを見ながら自慰にふける(しかもそれを母親に見られていゝ)。誰とでも寝る職場の女性に迫るが拒否される。結婚したのに体を許してくれないアイリーンに、金をちらつかせてまで寝るよう迫る。極めつけは、車の助手席で眠っている女性の下着を見ながら自慰をするという、シンジ君も真っ青な変態ぶり。この時の安田顕の表情は、生涯忘れられないレベルのインパクトだった。男の本当の姿を見せられているように、笑いながらも笑いごとできないような気がしてくる。

無様ながらも、必死でアイリーンの愛を得ようと頑張る岩男を見て、いつの間にか応援している自分に気付く。ついに

二人が結ばれる場面は、とても感動的だ。

ハッピーエンドで終わるのかと思いきや、そこからさらに地獄のような展開になる。何もかもダメだったという絶望的なラストを予感した時、監督は奇跡のプレゼントを与えてくれる。人々の無様な姿ばかり見てきた2時間15分のラストに、とても美しいラストシーンが用意されていた。最後に流れる主題歌も、映画の内容にぴったりと合っていて、とてもよかった。

この映画は、岩男だけでなく他の登場人物もすべて無様な姿をさらしている。

自分の幸せを求めて、あるいは、愛する人の幸せを願って。その姿を見て、笑って泣いてまた笑って。そんな、感情を強く揺さぶる力がみなぎっている映画だった。



『リバーズ・エッジ』

林久登 スタッフ

2018年 キノフィルム／木下グループ 118分

監督 行定勲

原作 岡崎京子「リバーズ・エッジ」漫画

脚本 瀬戸山美咲

出演 二階堂ふみ、吉沢亮、上杉柊平、SUMIRE

土居志央梨、森川葵

岡崎京子原作の同名「リバーズ・エッジ」は90年代の青春漫画の金字塔と呼ばれ、何度も映画化の動きがあったが、実現しなかったらしい。主役のハルナになった二階堂ふみは10代だった当時から興味を持っていて、『GO』（2001年）を見て目をつけていた行定勲に直談判をし、やっと実現にこぎつけたという。女優の提案で監督を動かした珍しいケースだ。それだけに二階堂の入れ込みはすごい。ここ数年、役柄を選ばず露出オーバー気味であったが、しばらくぶりに見る彼女は目力があり、くせのあるエロキューションが消えて成長している。

90年代の初頭は、阪神大震災や地下鉄サリン事件（19

95年)が起こり、不穏な空気が漂っていた時代だ。そんな生き辛い時代を過ごした高校生たちのリアルな日常を描いた群像劇。

ヤルことしか考えていない男観音寺(上杉柇平)、やりたいたいことが見つからず、次々と男と関係している女ルミ(土居志央梨)、ストイックなゲイの男山田(吉沢亮)、一途に男に寄り添う女カンナ(森川葵)、拒食症の女こずえ(SUMIRE)等々、過激な若者の行動について行けないところも多い。同じ青春群像劇でも、同時期に出た『君の鳥はうたえる』を「静」とすれば、この作品は「動」といった感じか。しかし、肉体をぶっつけ合うことでしか生きている実感がつかめない男観音寺と同性愛者山田の持つ精神性を対峙させ、若い頃、誰もが葛藤するリビドーを描いているところは胸に響く。

瀬戸山の脚本がいい。普遍的な若者の姿を巧みにとらえている。原作の漫画が若者の間で神格化されているのがわかるような気がする。それに加えて、劇中の出演者たちへの突撃インタビューが面白い。行定が思いついたのだそう。役柄としての立場だけではなく、自分はどういう若者なのかも含

めて問う、やりとりは微妙な間があったり、役者の本音も出て彼の狙いは的中したと言ってもいいだろう。通り一遍の青春群像劇を超えて若者の気持ちがりリアルに伝わって来る。

その一部を紹介する。監督の質問に答えるハルナ(二階堂ふみ)

監督 「彼(上杉)と別れてさびしい？」

ハルナ 「さびしいって、何？」

監督 「大事なものが消えるということ」

ハルナ 「：.なら、さびしくないと思う」

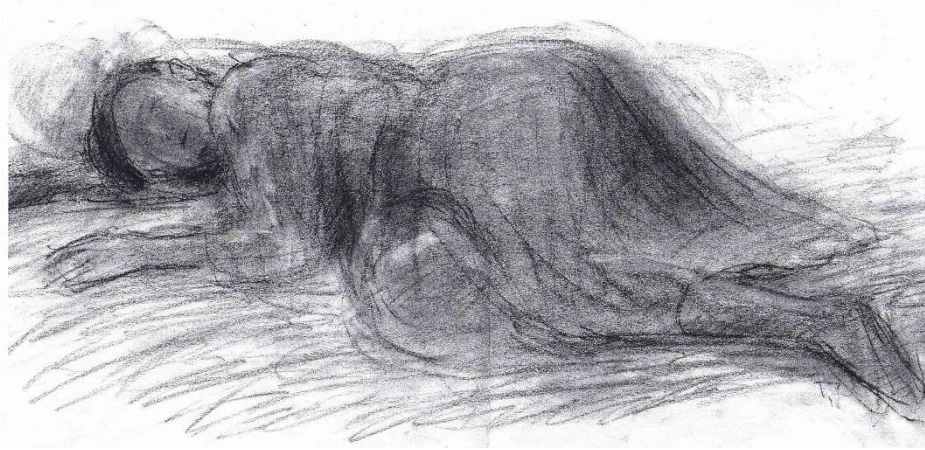
と答えるが、ラストでゲイの山田(吉沢亮)に「君がいなくなれば、ほんとうにさびしい」と、言われ、ハルナは号泣する。彼女は初めて「さびしい」という意味を実感する。

(シナリオ2018年3月号)

ハルナが二階堂なのか、二階堂がハルナなのか、原作と同時代に生きた彼女が見事にシンクロした作品になっている。

二階堂の他に目についた役者も多い、何といっても体当たりで演じる土居志央梨がすばらしい。しなやかな白い肉体が躍

動する濡れ場ショットは鮮烈。他に長身の上杉柗平も思慮浅い青年を好演。異星人のようで、ハツとさせられる存在感を見せるSUMIREもおもしろい。



『津軽のカマリ』を観て 水野圭次郎 むぎの映画部

2018年 太奏 104分

監督・製作 大西功一

出演 高橋竹山（初代）、高橋竹山（二代目）

最近、ミュージシャンに関するドキュメンタリーや劇映画が相次いで公開されています。その中から津軽三味線の高橋竹山のドキュメンタリー映画「津軽のカマリ」を紹介します。「カマリ」というのは津軽弁で「匂い」を表す言葉で、竹山は「津軽三味線を聴けば、そこに津軽が表れてくるような音、匂いを出したものだ」と自伝で述べています。

本作品の大西功一監督は2012年公開の映画「スケッチ・オブ・ミヤーク」という映画で、失われつつある宮古諸島の神歌・古謡とその継承について鮮やかに描き出しています。今回、どのように高橋竹山が描かれるのか興味深く鑑賞しました。

幼少の頃、半ば失明した竹山は生きて行くために近所のボサマ（盲目の門付け芸人）から三味線と唄を習い、17歳で独立し、家の門前で芸をして金品をもらう「門付け」をしな

がら物乞い同然で東北北部や北海道を回りました。竹山はわずかなお金を節約するため、三味線の一番細い三の糸さえも切らぬよう、柔らかい撥さばきで力強い音を出す独特の奏法を編み出しました。また、尺八や横笛も独学で習得し、名人も唸らせる腕前だったそうです。

この映画では残された本人の映像、親交のあった人々の話、津軽の信仰、風習などを織り交ぜながら、高橋竹山の生涯とバックボーンである津軽の原風景を浮かび上がらせています。もう一つの柱として二代目高橋竹山を通して見た初代の生き様と津軽三味線を継承した現在の姿を映し出しています。二代目は東京生まれの現代的な女性で、師匠から学んだことを大切にしながらも、様々なアーティストたちと親交を深め、海外公演も行うなど津軽三味線の可能性を広げて来ました。しかし、本場青森では彼女を二代目として容易に認めない者が多く、独立から長い時を経てやっと青森単独公演に漕ぎ着け、炎のような演奏に万雷の拍手が起こるラストシーンは見事でした。

初代が初めて沖縄を訪れた際、道中で沖縄戦の悲惨さを聞き、非常にショックを受けました。公演で沖縄の印象を話す時に感極まり絶句してしまい、観客を深く感動させたと語ら

れている場面が印象に残りました。きっと目は見えなくても鋭い洞察力と温かい心を持っていたからこそ、情景がありありと浮かび、人の心に響く演奏ができたのではないかと思いません。

ちなみに北島三郎の歌う「風雪ながれ旅」のモデルは高橋竹山です。次に機会があれば新藤兼人監督の「竹山ひとり旅」も観てみたいと思います。



『私の奴隷になりなさい』第二章

「主人と呼ばせてください

豊楽志夫 ブラックシープ

2018年 KADOKAWA 103分

監督 城定秀夫

出演 毎熊克哉、行平あり佳

『私の奴隷になりなさい』シリーズの二作目。男（毎熊克哉）がスナックで口説いた女（行平あり佳）は、平凡な人妻だったが、逢瀬を重ねるたびに、女はアブノーマルセックスにおぼれ大胆になっていく。しかし、肝心の濡れ場シーン、やたら舌をからませるが、セックスシーンはワンパターンで新鮮味がない。そもそも、オイラにとって、チンピラ役のイメージが染みついてる毎熊克哉がポルノはどうもしっくりこない。女もまあ普通の女で、特に印象に残らなかった。後で知ったがこの行平、何と「日活ポルノの聖子ちゃん」と呼ばれた寺島まゆみの娘という。母娘2代にわたるポルノ女優ということだ。

さて、この作品ラストはなかなか粋な終わり方だ。女は久しぶりに夫と交わった直後、その様子を男に話すと男は狂ったように女を抱き発射する。やがて女は妊娠したことがわかり姿を消す。それから2年後、とある町の踏切の向こう側でチャイルドカーに子供を乗せた女と再会する。どちらのスペルマが勝ったのか、としようもないことをオイラが考えてると、電車がゴーと通過し、そのままエンドロール。

ポルノはやはり出演する女次第だ。壇蜜がブレイクした6年前の第一作をDVDで見直す。当時の彼女はポルノ女優になる為に生まれて来たような女で体全体からフェロモンが出ていた。それをけれども丸ごと見せてくれた。

豊満なボディで大きめのオッパイは今にもはちきれそう。顔もエロいし、その存在感は際立っていた。しかもこの時の男女の絡みは、カメラがどつからでも来いといった刺激的な映像が続き、なかでも長回しのオナニー場面には息を呑んだ。過激なショットが多いせいか、この作品はボカシが随所に入っていた。しかし、第二作は全く入っていない。それだけ冒険をしていないということだ。カメラが委縮している。リスクを負わなくて何がポルノだ！